

山と博物館

第11巻 第5号 1966年5月25日 大町山岳博物館



山岳博物館にのぞむ

新しい任地にある山岳博物館をさっそく見て、このような文化事業はどきどき同じように、限られた予算と、少ない人員で、そこにいる人たちの熱意と努力だけで支えられているように感じました。

ただ山岳博物館は、対象が大きな山々であるだけに、多くの制約のなかで、そこにいる人たちのすぐれた発想が、いろいろな実を結びかけている印象を受けました。

山々といえば私たちの目には、ここ数年「自然を守ること」と「大衆に開放すること」の二つの要請があるように感じられます。

さいきんの山登山ブームについては、なんとも表現できないほど、つきからつきへと人が押しかけてきます。そして、かけがえない山の自然も、あれもこれもと壊されていきます。

「自然を荒らすようなやつは、山にくるな」と、登山を制止できない以上は、「自然を守る」と「大衆に開放すること」の二つの要請は、どうにも両立しないようです。

そこで、この二つの要請の接点を見つけることが必要になります。

私は、山岳博物館に、この接点となることを期待したいと思います。「自然を荒らすようなやつは、山にくるな」というかわりに、山岳博物館で「山とは、こんなものですよ」と教えてあげてください。山々を荒らすものが人間である以上は、山々を理解する人間がふえれば、自然を守る気持ちも育てられるようになるでしょう。

それにしてもこのような大切な役目を持った山岳博物館に、もっとたくさんの子算と人員をあげたいものです。

(春原修樹)

ライチヨウの姿を求めて

山岳博物館学芸員 平 林 国 男

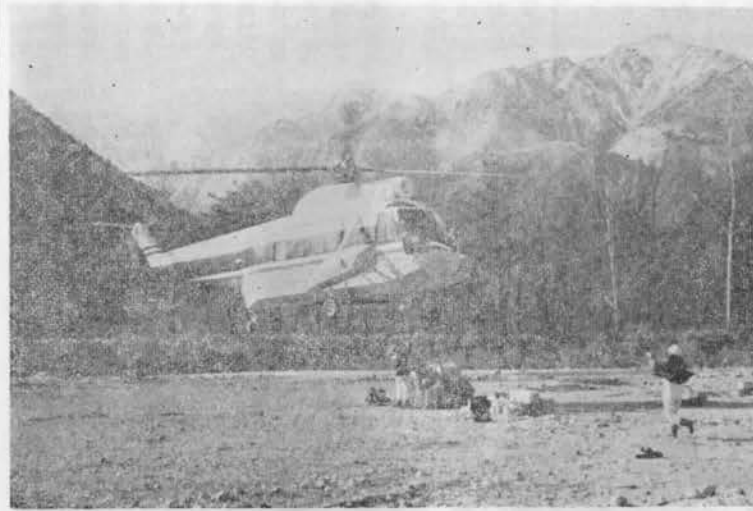
※爺ヶ岳でクランクイン※

四日五日、午後二時三十分、快晴の青空には一昨日来降り続き、関係者の気持を暗くしたおそ雪の影は全く見られない。

ローターの廻転が急に速まったと思う間もなく、フワッと持ち上げられた感覚が、つまずきから全身にひろがる。映画「特別天然記念物ライチョウ(仮題)」の撮影第一次隊として爺ヶ岳に向うのだ。第一次隊は山博学芸員二名と日本シネセルの撮影スタッフ四名で構成されている。

日向山ヘリポートを出発したヘリコプターは、安曇平に散在する家並みを望みながら次第に高度を上げ、大きく左旋回して爺ヶ岳天狗尾根を足下にまたぎ扇沢側に渡る。「小屋はどの辺々」パイロットのどなり声がエンジンの騒音に吹き消され、口もとに耳を近づけてもとぎれとぎれにしか聞えない。稜線すれすれに飛行し、雪に埋まった種池小屋を発見した。小屋はほとんど雪の下に入り、屋根の一部が頭を出しているだけである。パイロットは指先で了解のサインを示した。

着陸地点は昭和三十八年の冬期調査の際ヘリポートとした小屋の西側にとることにした。「風向きは」再びパイロットが耳もとでどなった。パイロットの肩越しに機首の前方を見渡した時、どこの登山パーティーが残したものか一本の赤い標識が目に入った。機体は標識布の動きを目安に旋回して着陸姿勢に入る。パイロ



ットから送られた降下のサインを合図に扇を開けて雪上に飛び降りた。廻転されたままのローターから吹きつけられる強風が、雪煙をまき上げる中で荷下し作業が進められる。一トン近い荷物と六人の隊員の輸送は三回の飛行で終了した。直ちに種池小屋の二階の小窓の廻り出しと荷運び荷解など整備作業が開始される。

日向山ヘリポートより種池小屋へ

昭和三十八年の冬期調査では装備や機材だけを空輸し、隊員は南尾根を登行した。も

とも当時は後立山連峯での冬期における空輸は始めての試みで、楢尾根にヘリコプターを着陸させることさえ問題があり、山岳地帯できたえたベテランのパイロットも自信を持っていない様子だった。最悪の場合は空中から荷物を投下する方法をとることにして空輸の方針を決めた。

※大町山博とライチヨウ※

大町山岳博物館がライチヨウと取組んだのは昭和三十四年であるから、現在まで八年の歳月が流れようとしているわけである。

北ア連峰を後にひかえ、これらの山岳をホームグラウンドとして博物館活動を展開する大町山博にふさわしい対象と考え、地の利に恵まれた山博で取上げなければやってくるところがないだろうといった自負にも似た気持ちが、ライチヨウに関する諸事業を大町山博の重点事業として取上げた大きな動機となっている。

当時高山のシンボルとまで云われ、人々に親しまれ、また特別天然記念物として国の保護が加えられているライチヨウも、その生態や生活の姿についてはほとんどわかっていなかった。生息数にしてもある人は減少しているとい、またある人は減りもしないが増えもしないといったあんばいにまちまちで、おほかたの見方は、昔日に較べると減少の傾向が見られるといった所へ落着いていた。それでもなおその実数や減少の原因となると、あまりいいこじつけを聞かされるに過ぎなかった。

大町山博では昭和三十六年の五月から生活史基礎調査に取組み、その年は十月までの繁殖期を中心とした生活の実態を把握した。さらに一年後の昭和三十八年には三月から四月まで非繁殖期の生活史を調べあげ、未解決の問

題を多少残しながらもライチヨウの生態に関する基礎的な事項が解明された。

その後はこの調査に基づき、保護増殖法の手だてを究明するために、高山現地における移動舎による保護法の研究や、山博園内に設置された飼育施設での人工フ化、人工育雛による増殖法の研究など保護増殖に関する一連の仕事が継続されている。

一方、この鳥のもつ意義や価値、あるいは保護増殖を考へなければならぬ理由について、一般の人々に広く知ってもらうために、博物館のもつ機能の一面としての社会教育の立場から、関係資料の館内展示、図書ライチョウの生活刊出版、あるいはスライド会、八ミリ映画会など機会あるごとに当時の資料が活用され、このほか全国各地で催される展覧会や図書、雑誌などへの資料提供が求められ、教育普及活動の貴重な材料として働らきつつけている。

今回の映画撮影への協力もライチヨウを材料とする教育普及活動の一環として、本年度の博物館事業に取上げられた仕事である。

※ライチヨウ映画の製作計画※

空輸された荷物の片付けもそこそこに、オパシーユーズにアイゼンの完全装備に身をかわため、撮影の下調査に出発した。

過去の調査結果によると四月五日前後は、不定群と称する冬期集団がくずれ始め、縄張り形成が始まる時期である。群内の個体間に順位が成立し始め、高順位の個体から次第に縄ばりを設定し、つがいを形成するのであるが、これらの変化は一カ月とからないうちに進んでしまう。

山頂の季節の進行は年によつて大きな変化があり、一カ月近くもずれの生じる年があるもしくかり今年も季節の進みが平年より二十日早かつたとすると四月五日の入山では、すべてのライチヨウがつがいになってしまい、順位決定や縄ばり設定期の撮影がだめになる



雪の消えた場所を覗きつゝメス

撮影基地の種池小屋までは隊員資材ともに無事に到着したというもののライチョウの状態がわからないために不安であった。製作費や日程が充分あり、二カ年がかり位の余裕のある撮影ならばあせる必要が無いが今回の映画のようにすべてがぎりぎりの条件では、いちかばちかの賭に似たやり方が多くなる。

「第一次隊の入山予定日を何日にしましょうか？」これは文部省で開かれた打合せ会議の、日程に関する協議項目であったが、答えはスムーズに出なかった。

山麓から眺めた爺ガ岳の融雪状態は、三月

中旬から下旬にかけての異様な気温上昇で、一時は四月下旬の様子になったことを覚えていた。その後寒波がきて平年並にもどったとはいっても融雪に敏感なライチョウの性質から推して、生活史の進展が一挙に早まっているのではないかと心配される。

本来ならば下調査がなされて入山日を決定する手順を取るところであるが、そんな余裕は全く無い。いろいろ考えあぐねた結果「どうなるかわかりませんが、四月五日に賭けてみますか」といったところに落着いた。

動物の生態記録映画、それも、より高次の記録性や芸術性を求めるならば、すべての面にゆとりがほしいと思われた。

この映画は文部省文化財保護委員会が企画し、富山県、静岡県、長野県などライチョウにゆかりの深い諸県が共同製作するもので、製作担当の映画会社は日本シネセル株式会社があたることになっている。製作意図には「日本アルプスを中心として生息するライチョウ

ウは学術的価値のきわめて高い動物として特別天然記念物に指定されているが、近時登山者の急増と観光開発の急速な進展により漸減しその保存に困難が加わりつつあることが憂慮されている。このため、この特別天然記念物ライチョウの生息をその生息する自然環境を舞台として、ことにこの地区にライチョウと共に棲息しているわが国特産のカモシカの生態とあわせてフィルムに記録し、もつてこの稀少な動物に対する国民一般の認識と理解をふかめ、その保存の適正を期するとともに文化財保護思想の高揚に資さんとするものである」とうたわれている。

映画の規格は三五ミリ、イーストマンカラー三巻で、上映時間約三十分にとりまじめ、製作期間は昭和四十一年四月から四十二年三月までの一年間が予定されている。

※撮影スケジュール※

ライチョウの生活史における時期を把握するために三日間の日時がついやされ、当初心配された季節の進みは、それほどずれがないことがわかってきた。

調査が進むにつれて進んでいるだろうという予想とは逆に、むしろ一週間位遅れているという結論になった。

その遅れを裏付けるように天候が定まらず吹雪の日が続いた。晴天は一日ともたない日が多く、午前中晴れると午後は吹雪になり、あるいはその逆と、一日晴れて通すことは稀であった。

また晴れた時には常に強い西風がおられ、雪煙や雪粒がようしゃな吹きつけた。

種池小屋の出入口に使用した二階の小窓に吹溜る雪の除雪作業は毎朝の日課となった。四月中旬の天候としては珍しいことである。

吹雪に暮れる稜線ではライチョウたちが順位決定につづく縄ばり設定の日課をいとんでいた。

こうして四月五日から始まった第一次撮影は十二日間で一応終了し、四月十六日種池小屋にいとまをつげた。その後二十五日間を置いてつがいの生活をねらった第二次撮影隊が五月十二日に入山した。

第二次隊は山博学芸員三名、日本シネセル撮影スタッフ四名で構成され、再び爺ガ岳の稜線で八日間わたる撮影が進められた。

ライチョウの四季にわたる生態の変化に関するシーンは、すべて

爺ガ岳で撮影される予定である。集作り産卵期をねらった六月上旬抱卵期とフ化をねらった七月上旬、抱雛期の七月中旬、若鳥期の八月中旬と九月下旬、家族崩壊期につづく不定群の生活が十一月月上旬二月中旬には冬期の集団生活の撮影と、それぞれ七日間から十四日間わたるめまぐるしいスケジュールがたてられている。



さらにこれらの撮影のあい間を縫って剣、立山連峰、穂高連峰、白馬連峰、富士山などの撮影が組込まれ、ライチョウの姿を追い求めるはずのスケジュールは、逆にライチョウに振り廻されることにもなりかねない様相を呈してきた。

撮影中の隊員

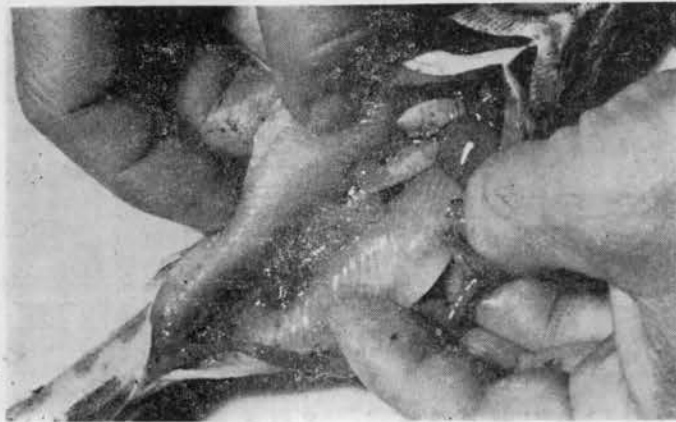
やまめめの産卵談義

仁科台中学校長 荒井好美

八年ほど前の秋、日光の奥にある水産庁の養魚場を見学した。場長さんは木曾出身の方で、特に親しみをもって種々説明された。皇太子殿下もよく研究のために訪れるとのことであつた。木の水槽には産卵の終わったやまめが、体の各所が傷つき黒色に変わって疲れ切つた姿でよたよたしてゐた。同じ条件のもとで飼養したためであらうか、どれも三十センチ以上のそろつたものばかりだ。やまめは一回の産卵でさけのように死ぬので、これもいづれ近中に死んでしまふといふのである。天竜川や木曾川水系にいるやまめは違ふで、うとうといふと、いや同様に一回の産卵で死に、年々産卵することはないといふ。なんだか納得のいかぬままに帰り、不審の念は消え去らない。十五センチ未満のものでも明らかに産卵するが、その大きさを死んでしまふのか。三十センチ以上のものもいるが、今まで一回も産卵せずにきたのか。多年の釣経験の者にもただしてみたが、みな場長の説は否定するししかしそう思うといふだけでは立証にはならない。明確に証明する方法はないものか、とにかくいい研究問題だと家人にも話しておいた。

私は山遊び川遊びが好きで、山菜やきのこ取り、魚釣など無上の楽しみである。釣の場合は夜明け前に家を出て深山幽谷に入り、清流を渡り岩を伝つて山気を満喫しながら、魚信を楽しむのである。だがえもの始末はめんどろくさく、何十というのをコンロで焼くのは大儀なこと、家人にまかせることが多い。忘れもしない三十八年四月七日の夕刻、勝手横のふろにはいつて釣の汗を流している。と、魚の腹をさいて処理していた中学の男の子が「とうさん、とうさんの喜ぶいい証拠がみつかつたよ」と呼ぶ。急いで出ていって

みると、十九センチの魚体で、昨秋の産卵でうみ残した卵が六粒と、今秋の産卵用と見られる卵巣一対が発育しかかっているものであつた。やあいいものに気づいてくれた。何よりの証拠であるとお喜び。近所にいる理科の先生にも協力してもらつて、写真にとつた。液浸標本にしたり大わらわ。これで少くとも木曾川のやまめは産卵一回では死なず、生長しながら年々産卵するといふ有力な資料になると思つた。



さつそくこの写真を日光養魚場の田中場長さんに送つた。御返書には、依然として産卵後の死亡説を堅持しながらも、今後さらに研究してこの疑問をとききたいと思つていとあつた。

た。数日してまた場長さんから書信があつてなかなか興味あることと、楽しんでゐる。とあり、あの写真をこの面の研究をしている稲葉伝三郎先生(東京水産大学教授)に送つて照会された、その返書を同封してあつた。

(稲葉先生の御返書を略記)

「さて珍らしい写真をお送りいただきありがとうございます。写真のような状態は産卵後の回復期のものに見られることで、おそろくきわめてまれに回復するものもあるかも知れませんが、何が原因か、あるいは何かを与えることによつて、一生に二回か三回産卵に参加させることが可能になるかという問題について、ビタミンDと関係させて本年からやつてみるつもりでおりますので、特に興味深く拝見させていただきます」。

やまめは大体十月中旬に産卵するので、その後を特に観察したのであるが、十月から翌年の二月までは禁漁期である。そこで「學術研究のための魚族採捕については、下記の条件を付して承認する」といふ、木曾川漁業組合の御好意による特別の承認書ももらい、雪中も釣に出かけて観察した。この結果では稲葉先生の申す、きわめてまれといふことはなく、多くの例を採集することができた。

昭和三十九年夏、例の標本を持って水産大学に先生を訪れると、お忙しい中を差繰つて待っていて下さつた。そして次のような興味ある説明をして下さつた。

- 秋と三月初ごろ水温七〜八度の時に産卵
- 満二年で条件がよければ産卵、他も三年ではらむ、寿命は三年と何カ月ぐらゐ、四年以上のものはない。
- 条件がよければ二年で三十センチにもなる
- 卵巣は産卵後数時間で写真のように回復してくるように見えるが二か月内に死ぬ。

右によると、持参の標本ものは三月初ごろ産卵したもので、まもなく死ぬわけである。今までの観察では、秋産卵に関係すると雌も雄も体色がきたない黒色に変わり、冬を過

ぎて早春にはこの黒色も少くなり、やがて本来の輝くような鮮やかな色を呈し、さかんに活動してくる。だがこれも秋までは生きて産卵しないことになる。では一秋にどのくらい割合で成熟して産卵に関係するか気をつけしてみたが、十五センチより大きいものは、卵巣や精巣の状態からほとんど関係したか、あるいは可能とみるのできるものばかりであつた。これから推論すると、次年度まで生存し産卵するものは、その年十五センチ以下のも(実際は十三、四センチのものも大半は産卵)だけといふことになる。しかし陽春の候ともなれば、まったく元気な二十センチから三十センチ近くの美しいやまめが釣れるのである。なお三月初ごろ産卵するものといわれるが、腹中にうみ残しの死んだいくらかの卵のあるもの以外見たことがない。

四十一年の一月末には山梨県の大泉にある東京水産大学の実習場を訪れたが、結果は前の学説と同様で手がかりは得られなかつた。でも場長よりの後のお手紙には「お尋ねの件については今後の関係者の大いなる問題かと察知しております」とあつた。ひとり得た限られた数のえものからだけで断を下す無謀はしてはならないが、どうしても不可解な学説のように思う。大方の御教示を願ひたい。(ここでやまめといつたのは、実はあまごのこと、側線の上下に鮮やかな赤点がみられる)。

表紙説明

五月のライチョウ(つがい)爺ヶ岳にて撮影千葉 葉 彬 司

山と博物館 第11巻第5号

一九六六年五月二十五日発行

発行所 長野県大町市T.D.L(大町)二二一

印刷所 大町市下仲町 山岳博物館

大糸タイムス印刷部